

をして、當らしめて積極的抗日運動に民衆を動員してゐる。救國會は主として、献金運動、國債の應募、回國投資、其他本國より劇團を招致しては最後の勝利の夢を民衆に吹込む等、華僑の人心の收攬と救國抗日喧傳に奔走してゐる。河内に於ては華僑杯葛仇貨委員會が昨年成立し、積極的に日貨排斥運動を實行してゐる。斯かる團體は印度支那各地に在りて日貨抵制を嚴重に監視してゐる。

以上は一般的排日機關に就て述べたが、更に特殊的對日抗戰機關の實相に就て述べれば、南支攻略後蔣政權の西南後退と共に、佛蘭西當局の幾度かの辯明にも拘らず、印度支那殊に海防、昆明ルートが抗戰物資輸送路として非常に重要な役割を務めて來たことは吾々日本人にとりては實に奇怪至極な話である。此事實は何よりも一九三七、八年の雲南鐵道の旅客及貨物輸送の數字が最も雄辨に證明してゐる。

第十四表 一九三七、八年雲南鐵道旅客數及貨車輸送量

	乗客數	糧當り延 乗客數	運輸貨 物數量	公用運輸 貨物數量	糧當り運輸 貨物數量	糧當り、公用 運輸貨物數量	使用車 輛數
	一九三七年						
第一回半期	九七	四、〇〇八	五	三	一六〇三	二、〇一五	九、三五五
第二回半期	一、〇〇〇	四、三三六	三	三六	一、九七六	二、二六二	一、二、四一〇
第三回半期	一、〇三九	四、五六三	四	三〇	一、六九七	二、二一五	一〇、四一〇
第四回半期	一、一四四	四、八五四	七	三七	一、八〇九	二、三三三	一〇、七三三
一九三八年							

	第一回半期	第二回半期	第三回半期	第四回半期
乗客數	一、三三八	一、〇三一	一、〇〇四	一、一八八
糧當り延 乗客數	五、三六六	四、七四六	四、七四六	五、七〇三
運輸貨 物數量	三	一〇四	三	三三
公用運輸 貨物數量	元	三〇	三三	三三
糧當り運輸 貨物數量	三、一一四	三、三六六	三、三三三	三、三三三
糧當り、公用 運輸貨物數量	三、三六六	三、三三三	三、三三三	三、三三三
使用車 輛數	一、六九一	一、三三三	一、三三三	一、三三三

(Bulletin Economique de l'Indochine より摘録)

右數字は從來の香港を基點とする支那側の物資輸入路が雲南鐵道によつて代られ佛印が抗戰支那の輸血管となつた過程を明示する。此外諒山經由によつて兩廣方面即ち南寧及柳州への軍需資材輸送など實に夥しき數に達してゐる。然らば國民政府は之が實行に如何なる政策を執つたか。

- (1) 軍需品輸入機關として西南運輸公司を海防に設立し、宋子文の子宋子良をその代表者とし、全權は前十九路軍參謀長黃強が掌握してゐたが、最近元廣東派の首領陳濟棠が代つて實際の仕事に當つてゐる由である。
 - (2) 軍需品取引決済並に華僑金融機關として先づ河内に次いで海防に中國銀行支店を設置した。
- 又長期抗戰と共に、支那軍兵隊の減少を來した爲め、廣く南洋各地より義勇軍を募集せんとし、佛印に於ても越南回國服務義勇團を組織し、技術者を招致して抗日戰線へと送つてゐる。

印度支那に於ける一般華僑に悪い印象を與へたのは、和平派の巨頭汪兆銘が河内に逃避中に國民政府は藍衣社の暗殺團を河内に送つて、遂に二月二十二日、彼が股肱と頼む曾仲鳴を汪の隣家に於て射殺したことである。國民政府が斯くの如く目的の爲には手段を選ばぬ残忍な行爲を敢行したのに對して一部華僑間の聲譽を買つた。

第五、地方的抗日機關と本國又は在外同志機關との連絡 手段竝に相互地理的關係の検討

(汕頭と盤谷、スマランと福州の如き出身地との關係なり)

由來佛印は南支那とは地理的に隣接し、經濟的にも亦輸出入貿易に於て支那にとり相當重要な地位を占むる(第六表、第七表参照)關係上、國民政府も之を重要視し、華僑間の統一を企圖して以て國民政府の強力なる財的バックとすべく、度々國民黨員を派遣してゐる。殊に支那事變勃發後國民黨支部を河内と西貢に設け、蕭吉珊を中央より簡派して連絡に當らしめた。又廣西軍首領李宗仁は許復起を最近佛印に送りて華僑墾殖会社の株式を募集せしめ、以て華僑の西南支那開發への投資を奨勵してゐる。文化事業としては劇團(中國救亡劇團と云ふのが現在佛印を巡歴してゐる)を派遣し、各地救國會の支援の下に各種の宣傳と同時に献金運動を行つてゐる。

印度支那に於ける華僑は其本國との相互地理的關係に於ては汕頭と盤谷、スマランと福州と云ふが如き明確なる特徴を以て色分けることは出来ないが、その傾向を示すならば在住華僑の勢力は大略廣東人對福建人の割合は三對一の比である。

佛蘭西當局は華僑をその出身地別に五つの Congregation (幫) に別けてゐる。

- (1) 廣東幫 廣東省の東北地方珠江デルタ地方出身者商業に従事する者多く、又労働者手工業者、船舶業者も相當ある。
- (2) 福建幫 福建省南部廈門地方出身者多く、數に於ては廣東幫に劣るがその商業的勢力は遙かに之を凌駕す。
- (3) 海南幫 海南島文昌縣東部地方に住む廣東人の一部で、東埔寨で胡椒の栽培に従事する者が多い。

(4) 潮州幫 廣東省東北部地方出身者で農夫、漁夫、苦力等が多い。汕頭より出稼に出る。

(5) 客家幫 廣東省東北部海縣地方出身者で大部分は農夫、労働者、職人等であり、汕頭より海外へ出る。

右の中潮州出身者が印度支那に於ては比較的多く、タイ國に次ぎ華僑總人口の三〇%を占む。南洋地方に於ける潮州人の分布狀況は次の如くである

第十五表 潮州人の華僑人口構成割合 (臺灣日々新聞記事に據る)

タ	イ	國	佛領印度支那	三〇%
英領馬來半島	一二%	蘭印	印度	一〇%

而して潮州、汕頭方面出身者は商業的勢力は大したものではないが抗日意識は相當強く、同地方が皇軍に占據さるゝや、八月二日、直ちに越南潮僑救郷災總會を作り、杜鈞濤、陳雄、翁典南等を常務委員に舉げて自發的に献金運動を起して氣勢を擧げてゐる。

第六、華僑の對日態度を是正すべき實際的手段

一、日本側より講ずべき政治、經濟、文化の工作

(イ) 根本的對策

- (1) 華僑の出身地たる南支に於ける日本の儼然たる實力に依る支配と安居樂業の綏撫工作を徹底強化すること。
- (2) 親日政權の樹立竝に歐米列強に對する帝國政府の毅然たる外交。

華僑は歐米人と土人との間に在りて重要な經濟的役割を演ずると共に歐米人も之等華僑を土着人統治政策上利用して來た。斯くて華僑の經濟的地盤たるや侮り難き勢力を有するに至つた。乍然悲しい事には彼等はパトロンとしての近代組織の國家をバックに有たなかつたのである。それが漸次思想的にも文化的にも目覺めて來るに従ひ他の文化民族と同様に統制ある主權の發生を嚮望する様になつた。此の思想が熾て熾烈なる國家觀念にまで發達して來るのである。茲に彼等が第一革命以後統一途上にある蔣介石政權の支援を惜まなかつた理由が存するのである。彼等が民族としての斯かる希求は素より當然のことに屬するが、その實行手段に於て大なる違算と誤謬とがあつた。即ち傳統的以夷征夷の陋策と歐米勢力を過信して、東北の實力者たる日本を無視したことである。

茲に於て、日本として採るべき根本問題は彼等の欲求を具現するには親日的政權を樹立し、之によつて日本と完全に提携抱負してその理想を實現し得るものなることを彼等に深刻に認識せんめることである。

而して其が爲には英米佛に對する從來の妥協的外交を捨て去り、東北の安定勢力たる日本として毅然たる態度を以て自主的外交政策を確立しその威力を發揮して支那在來の歐米依存の舊き思想を拂拭することが肝要である。何となれば南洋華僑に對する態度は之は密接なる利害關係に立つ歐米諸國の勢力への拔道に通ずるからでもある。

(ロ) 具體的工作

以上の如き根本的對策に就て如何なる具體的、經濟的乃至文化的工作を實行すべきか。

(1) 華僑の經濟的地盤たる重要産業をして日本に依存せしめる。例へば印度支那に於ける産業の樞軸、輸出の大宗たる米は

日支事變殊に南支攻略により激減した。左表参照

第十六表 印度支那米輸出表

(Bulletin Economique l'Indochineより摘録)

(單位 千米突施)

年	月	支那向	香港向	支那向	香港向
一九三七年	一月	〇・一	四・七	一月	一・九
	二月	〇・四	一五・〇	九月	一〇・六
	三月	一六・八	八・七	十月	九・九
	四月	八・二	三〇・六	十一月	一七・五
	五月	一五・五	四三・三	十二月	二四・九
	六月	五七・四	二四・六	合計	一八三・八
	七月	二〇・六	一九・五		二二三・二
一九三八年	一月	三四・六	一三・一	八月	一
	二月	九・〇	一一・二	九月	二・八
	三月	二一・三	二二・二	十月	〇・五
	四月	一五・四	一四・六	十一月	一
	五月	一一・四	一三・九	十二月	一
	六月	三・一	一一・一	合計	一〇二・三
	七月	四・二	四・四		一五五・五

表示の如く事變以來印度支那より南支那への米の輸出は一路減退を續け、特に一九三八年十月廣東攻略後香港を除く支那への輸出は皆無の状態となつてゐる。従つて事變によつて一時失はれたる取引關係を帝國のイニシアチブの下に東亞新秩序の中に織込むこと及び一般貿易の調整は蓋し喫緊事であると信するのである。

(2) 南支那に於ける新貨幣の制定並に親日銀行の設立

銀行は經濟取引の心臓であり、貨幣は血液である。腐朽せる心臓と不純なる血液とを以て、高遠なる理念と強大なる實行力を併有する東亞共同體に参加することは絶対に不可能事である。

北支の聯銀券、中支の華興券に對する南支の新貨幣の制定並に日支合辦の親日銀行の設立は南方經濟發展上唯一無二の必要事である。無論この親日銀行には多數華僑の参加を要する

(3) 南支、南洋間交通機關の整備

(a) 南洋航空路の開拓

南洋各地に發展してゐる華僑とその本國とを連絡する爲、華僑と吾資本との合資にて一大汽船會社を創設し、南洋各地と南支及臺灣を連絡する定期航路を開くこと。

(b) 華僑汽船會社の設立

現在東京、臺北、廣東迄延びてゐる日本航空會社の航空路を更に延長し、河内、盤谷、蘭貢線と廣東、海南島、西貢、シンガポール、パタビヤ線並ニ臺北、マニラ、ダバオ、タワオ、マカツサル(メナド)線の三航空路を開拓すること。

(4) 親日政府の宣傳パンフレットを各地に頒布すること。

(5) 日本在留華僑より海外に居る華僑に對して日支親善の現實を認識せしめ、日本との提携によつてのみ彼等の生きる道は拓かるべき事を周知すること。

(6) ラヂオ、映畫等の宣傳機關による日支提携の氣運を醸成すること。

(7) 華僑有力者を日本に招待して通商關係を緊密にすること。

二、南支方面に於て日本側より講ずべき政治、經濟及文化の工作

根本的對策は前述の如く實力による事實的支配の存続、親日政權の樹立及助成と自主外交による東亞共同體理想への邁進が必要であるが、更に南支方面に於ける具體的工作として次の如き方策が考へられる。

(1) 幣制の確立並に華僑銀行の設立。

前述の如くであるが、北支、中支とは事情を異にし、殊に英佛勢力の地盤たる南支に於ては或程度の自由主義經濟の認容も已むを得まいし、従て他の經濟政策と並行して徐々に貨幣政策を遂行せねばならない。之が爲親日華僑と吾資本との合辦にて華僑銀行を設立しその支店を南洋各地に置く。

(2) 基本産業の確保。

電氣、水道、電信、電話、交通、運輸、鑛業等の基礎産業の確保に依つて他の一般産業の死命を制し、その調節に依り南支經濟を支配すべきである。

(3) 南支に於ける香港の貿易上の地位を奪取する爲に、廣東をして一大貿易港たらしむること。夫れが爲には

- (イ) 貿易港としての設備を充分備へること。大規模な黄埔の築港は最も必要なり。
- (ロ) 南支に於ける政治、金融、經濟の中心地たらしめること。此の意味に於て汪兆銘が廣東を和平運動の出發點としたことは極めて有意義である。
- (ハ) 粵漢鐵道の基點であり、更に京漢線によりて北支と連絡し、支那大陸を南北に縦貫する樞要地點であり、南洋航路の發着點として且又南洋航空路の基地としての廣東の地理的優位を活用すること。
- (ニ) 廣東を自由貿易港たらしめること。
- (4) 廣く南洋に活躍する華僑をして彼等の郷土開發資金を投資せしめること。
- 華僑は一般に愛郷心甚だ強く、故郷に錦を飾ることを以て最大の榮譽とするが故に、若しも治安の維持と幣制確立實現の曉には彼等の絶大なる財力を以て郷土開發へ投資させることは大して困難でなく、相當の實績を挙げ得るものと觀られる。但し彼等に回國投資を勸説するには日支合辦事業の意義と有利性を充分認識せしむるを要する。
- (5) 南支南洋を連絡する交通網の確立。
- 航路並に航空路に依る南支南洋間交通の機關の整備緊密化に就ては前述の通りである。
- (6) 日本宗敎家を南支に派遣して布敎に従事すること。
- (7) 南支より日本學術視察團を組織して日本の文物制度を見學すること。學術交換敎授の派遣、少年學生の夏期親善キャンブ等の實行。
- (8) 眞の意味に於ける慈善並に救恤事業(例之施療院の設置の如き)と日本開業醫の進出。

- (9) 日本語學校の設置及日本文學の翻譯普及。
- (10) 支那的リズムを取入れたる日本語レコードの普及。
- (11) 一般藝術家或は文士等の交友による文化的事業の創設。

三、在外に於て日華共同線又は華僑の利權を保護主張するの利害可否

この命題に於て、東亞共同體理念の下に、日華共同線又は華僑の利權を保護主張することは原則論としては當然認容し得べきも、問題は時間、空間的觀念を度外視して範疇的に之を規制することは出来ないと思ふ。仍ち齊しく南洋華僑と總稱するも、その地理的事情乃至社會的環境に依つて抗日空氣に濃淡の差がある。

(イ) 抗日意識比較的稀薄なる地域

例へばボルネオに於ける華僑移民は、古くより渡來したる福建人多く、巨萬の富をその土地に於て築いたもので、本國政權の何人に屬するやに付ては利害關係も少く興味も薄いのみならず、日本商品ボイコットによる自己の蒙る損害が甚大である爲却つて日支兩國の融和を希求する者が多い。故に斯かる地方に於ては、將來適當な時期に日華共同線を伸張して華僑のバックとすることは東亞共同體の建前から當然の措置と考へる。

(ロ) 抗日空氣比較的濃厚なる地域

例へば人口の三分の二が支那人が占むるシンガポールに於ては、その量と質との兩面より言つても比較的新客が多いこと

と、統治政權が強く日本に對する露骨な敵愾心を有する英國をパトロンとしてゐる爲抗日空氣が頗る熾烈である。斯かる地域に在つては、日本側よりする日華共同線の旗幟を鮮明にすることは却て不可である。

今印度支那に問題の焦點を置いて稽へて見るに、近來佛蘭西當局は東亞の安定勢力たる日本の立場を認識し、比較的友好政策を執り來りつゝあるが、元來が自由主義的な國民であるから、佛本國の政策と印度支那政府の方針とは必ずしも一致しない様な所もあるらしい。例之印度支那の鐵鑛石を日本に輸出するに就ても、植民地政府としては自由に無制限に日本に賣り度いが、本國政府の方では却て歐洲政情の不安とか危機とかに籍口して之を禁止するやうな場合が昨年九月以來再三發生してゐる。尤も今次歐洲開戦直後の此禁令は一時解消したが、一方在住華僑も亦多年日本は西貢米の好得意であつて莫大な利益を享受してゐた關係上、その抗日運動は微温的なものであつたが、夫の滿洲事變の發生と日本の西貢米輸入禁止に逢つて以來此關係は破却されたのである。そこに今度の支那事變が勃發して、國民政府の印度支那が南支那の隣接地域である重要性に氣付いて廣東陥落後は軍需品輸送路として最大の期待を此處にかけ、支那要人の重慶、河内間の往來も激しくなり、中央より派遣されたる抗日指導員の宣傳は日獨防共協定による佛蘭西當局の對日空氣の惡化に拍車をかけて排日抗日的氛圍氣を醸成した觀がある。

乍然バイアス灣上陸後十日にして廣東を奪はれ、次々に各重要都市の失陥され行くを見て、流石の華僑も漸く蔣政權に愛惜をつかし始めた時、突如前國民黑副總裁汪兆銘が河内に乘込み來り、次いで數次に亘り發したる和平通電は印度支那華僑に取りては地元だけに相當民心の動搖を來した。

最近の獨ソ不可侵條約に次ぐ歐洲國際狀勢の緊迫は佛蘭西の對日政策を改變せしめつゝある。現に河内に在る臺拓系の印度支那産業會社に對する鐵鑛石輸出禁止の解除や、支那行武器輸送の禁遏政策などの事例を見ても對日空氣の好轉は想像に難くない。

廣東に萌芽しつゝある親日政府が漸次物になり、且つ歐洲政局の緊迫せる現在こそ、東亞共同體の立場より日華共同線を高唱し、華僑の權益を庇護せねばならぬ。

而して印度支那に關する限りそれは日華提携の下に輸出の大宗たる米の支那輸入を第一著手としたい。

四、華僑の文化青年層に對する對策

國民黨の政權把握以來数十數年、南方華僑に向つて放送せる排日抗日教育が骨の髓迄滲み込んで成長して來た華僑の有識青年層に對しては思想戰を以て之を擊破しなければならぬ。仍ち歪曲されたる三民主義の徹底的修正と、之に依りて新生する理念の創造である。

國民黨の指導原理になつてゐる民族、民權、民生の所謂三民主義は鵝的存在以外の何物でもない。國家主義近代的デモクラシー、社會主義が一つの坩堝の中に入れられ之に儒教と云ふ調味料を加味して搔廻したものが即ち三民主義である。

獨逸の大社會經濟學者 Weber の言葉を以てすれば、社會組織の進歩改變は前の音の鳴り止まない内に後の幽かなる音が次第に大きな音律となるフーゲの如くであらねばならぬ。

封建的社會經濟組織に未だに片方の足を突込んでゐる支那が、先進資本主義國日本の了解なくして、その民族國家主義を強行するとき如何なる結果が招來されるかは明瞭である。

若し夫れ民族主義を敢行するときは共產主義陣營に走るは必然である。而も孫文は三民主義の中民族主義を以て本體とした。國民黨は日本を無視して民族國家主義へと盲進した。この邪道が今次の日支正面衝突を惹起し、日本の正義の鐵鎚下に呻吟せねばならぬ運命となつた原因である。斯くして華僑文化青年層に對しては如上の事情を説き三民主義に代る新理念を確立し、日支共存共榮に依つてのみ相互に生き得るものなることを認識せしめなければならぬ。

而してこの新理念は從來歐米に於て常識化してゐる如く、第四期獨占資本主義時代に於ける金融資本の帝國主義的發展と云ふマルクスの既成概念の範疇のみを以て簡單に片付け得られない。苟も世界史を繙くもの誰か西歐の爛熟せる資本主義文化に對して新しき東洋文化の創造を否定し得よう。東洋には古代に於て偉大なる精神文化の花が咲いた。之に對する Anti-Chinese として西歐に於て自然科学を基調とする物質文化が興隆した。東西兩文化を調和し綜合する爲の Synthese として今や新しき文化の創造へと進軍しなければならぬ。茲に支那事變の世界史的意義があり、支那兩國民の共働が要請されねばならぬ理由がある。然らば斯かる日支共同體の現實的内容は如何。それは東亞に於ける完全なる融合經濟（私は敢てプロツク經濟なる既成語を排する）である。日本の資本と技術、支那の土地と人が完全に融合して一つの生産機構を完成した秋に始めて、東亞に於ける新文化は芽生ゆるのである。

這箇の見地よりして、廣東に文化研究所を設立することの意義明白となるのである。

第七、華僑の本國送金又は贖金に關する消長及現情の大要

華僑の本國送金又は贖金に關し正確なる數字は不明なるも、華僑問題を論ずるに當り最も重要なる問題であることは疑な

50

國民政府も華僑の絶大なる財的實力を熟知するが故に躍起となつて本土への送金又は贖金を獎勵してゐる。

華僑の本國送金の消長を觀るに、過去に於ては年に四億元位の送金をなしたる時期もあつたが、大戰後の世界的經濟恐慌の影響を蒙り、一九三三年には二億元に低落した。然し更に最近の物價昂騰殊にゴム價高の結果、再び回復し一九三六年には三億三千二百萬元となつてゐる。

第十七表 華僑送金額 (但一九三三年—一九三六年)

一九三三年	二〇〇,〇〇〇,〇〇〇元
一九三四年	二五〇,〇〇〇,〇〇〇元
一九三五年	二六〇,〇〇〇,〇〇〇元
一九三六年	三三三,〇〇〇,〇〇〇元

(南支經濟叢書 四九八頁)

右の數字は中國銀行年次報告に依るものであるが、エツチ、ビー、モールス氏の調査によれば支那本國への送金額は年々七三、一二〇千海關兩に達すると云ふ。然らば印度支那に於ける華僑の本國送金は何の位の額に上るであらうが、之に就き正確なる數字を知ることが困難である。何となれば彼等の本國送金は一部支那系銀行又は外國系銀行を通じて行はれる外一部は信局客頭等の庶民金融機關を通じて行はれるからである。

然し前述モールス氏の一九〇九年の見積に依れば最低五、〇〇〇千海關兩、最高一五、〇〇〇千海關兩と稱してゐる。之に

對してシ、エフ、レーマー氏は之を過大なりとし、全世界に於ける華僑の本國送金額はその時期により異同あり、その一人當り平均額を期別に次の如く評價する。

第十八表 印度支那華僑本國送金推定額

(王文阮氏 Les Relations entre l'Indochine Française et la Chine)

千法郎

第一期 (一八一七年—一八八四年)	三
第二期 (一八八五年—一八九八年)	五
第三期 (一八九九年—一九一三年)	一〇
第四期 (一九一四年—一九二二年)	一〇

以上の推算を参考として更に中國銀行年次報告に據つて考ふるに、華僑の年送金額は大體三億元と觀て大過あるまい。今海外に在る華僑總數を概算六百萬人とすると一人當り、平均五十元となり、印度支那華僑人口を概數四十萬人とすれば年送金額は大體二千萬元程度であることがわかる。

乍然日支事變の戦火が燎原の火の如く南支に波及し、厦門、廣東、汕頭と華僑出身地が皇軍の手に占據せらるゝや、最早昔日の面影なく正確な數字は詳にし得ないが、その本國送金の著減せることは想像に難くない。華僑の儲金に就ては一層その正確な數字は知り難い。本年八月二十五日南僑籌賑總會の發表せる數字を基礎として推算すれば次の如し。

第十九表 一九三九年華僑六月份匯出義款統計 (越南日報)

英 領 馬 來

二、一九〇、一八四・三二

關 領 印 度	一、二五八、五二五・五〇
泰 國	四〇〇、〇〇〇・〇〇
香 港	三〇〇、〇〇〇・〇〇
緬 甸	二七二、二二二・八〇
比 律 賓	二〇〇、〇〇〇・〇〇
印 度 支 那	八八、六〇六・九九
計	四、七〇九、〇二九・三二

この數字は重慶政府の機關紙の發表に係るものである故に幾分誇張があるとしても、大體月平均三、四百萬元位は抗戰獻金、建國獻金、籌備獻金、購機獻金等の名義に依つて儲金されてゐると考へられるから、一昨年七月七日蘆溝橋事件の發生以來抗戰既に二年有餘其間に一億元餘の儲金がなされてゐるものと推定される。

(一) 本邦の在外金融機關に送金を蒐むることの能否

印度支那に於ける華僑の經濟的地盤は輸出の大宗たる米取引であり、更に支那の雜貨、生絲の輸入を以て莫大なる利潤を獲得してゐたことは前述の如くである。而るに今次事變以來全く蹉跌を來し、特に南支那失陥後は香港を除いては取引の決濟が著しく困難となつた。斯くして取引決濟銀行の存在の有無は彼等の死活問題に迄到達してゐる。

去る七月三十日のAKラヂオに於て最近南洋華僑の吾正金銀行經由本國送金を依頼に來れる者續出しつゝありと云ふ。

不幸印度支那に於ては横濱正金銀行西貢支店並に華南銀行海防支店共に一九三一年及一九二八年に閉鎖され邦人金融機關

皆無であるが、若し本邦銀行にして印度支那に進出して華僑の送金並に南支那占據地域との爲替業務を司るならば、華僑資金の幾分は之を吸収し得るかも知れない。然し中國銀行、佛支銀行其他印支銀行、香上、渣打等各外國銀行も相當活躍してゐるから大なる期待は掛けられまいと思ふ。

(二) 南支經濟復興資金として有力自治政府又は特許機關の發行に係る經濟復興債券又は富籤が實行せらるゝ場合の之に對する華僑の放資力の觀察

佛印に於ける華僑の經濟的實力に付ては既に縷述せる通りであるが、南洋に於ける地域別献金高に關する前掲第十九表に依れば印度支那に於ける六月分献金の華僑人口五萬人に過ぎぬ、比律賓の二分の一にも足らぬ不成績を示してゐる。之は如何なる現象であらうか。之は印度支那華僑の民心が蔣政權から離反した結果とも考へられる。

和平派の巨頭汪兆銘が重慶脱出後永らく河内に居を構へ、天下の大勢を靜觀しつゝ數次に亘つて和平通電を發した。佛印は地元だけにその華僑に與へた影響も大であつた。又前項に於て述べたるが如く利害關係から考ふるも佛印に於ける多數の華僑は支那本國と貿易關係復舊の一日も速からんことを望んでゐることは疑ない。

由來印度支那は地理的に支那西南地方と接壤してゐるが爲本國の影響を受けるのも容易で且迅速である。一方重慶政府の輸血路として執拗に之に働きかけてゐるのは勿論であるが、他方隣接せる廣東に親日政府が樹立され、和平運動が擡頭して來れば、又最も速くその影響を感受するであらう。今や汪兆銘が首班とする新政權の隆々たる發展が實現しつゝあるとき、本自治政府又は特殊機關に係る經濟復興債券又は富籤が實行されるならば、佛領印度支那の華僑はその利害關係より考察す

るも結局は和平派に歸屬すべきは明瞭であり、之に對する放資力はその強大なる經濟的地盤より考察して、從來華僑の年分の送金額二千萬元と國民政府への献金年四千萬元中佛領印度支那負擔分を大體四百萬元と見て合計年二千四百萬元の放資力は充分にあるものと斷じ得るのである。

結 論

以上論述したる所によつて吾人は次の結論に到達する。

仍ち印度支那の華僑はその地理的重要性の故に、又その人口數の比較的少數なるにも拘らず、商業殊に貿易に於て強大なる經濟的勢力を保持するが故に、日本に於ける識者の注意を喚起したい。

而して、近時國民黨の民族統一運動の影響を受け、佛印華僑間にも或程度の國家意識が醸成され來つたことは事實であるが、結局彼等華僑の動向は支那本國に於ける政局の推移によく左右されると共に、更に佛印當局の統治方針に反映する國際政局の變轉の如何にかゝることである。

(一四、九、原田玄龍)

(附) 南洋華僑の經濟的活動狀況

一、緒

論

華僑は今や、全世界に亘つて居住してゐるが、之は實に彼等が寒暑を厭はず、又、萬里の波濤、深山幽谷をも乗越へて地球上に到る處に、其の生活を求めて進んで行つた賜に外ならぬのである。

現在、海外に生存してゐる華僑の總數は、數千萬といふ多數に上つてゐるが、中には一つの國家を形成するに足る丈の集團的なものも有つて、其の發展振は何と云つても旺盛だと云はねばならぬ。

之等數千萬の華僑が海外に移住、發展するに至つた動機は、別に本國政府の殖民政策に依つたのでは無く又、社會の助力や鼓舞が有つた譯でも無く、要するに嘗々其身の現狀に甘んずることを欲せず、何とかして自分等の在支同胞に劣らない丈の生活がして見度たいといふので、自ら志を立て、冒險を犯し、海洋を乗越えて移住し、發展したといふのが先づ真相である。

而して孜々經營遂に、所謂、功成り名遂ぐるも錦衣歸郷する者は極めて稀であつて、大部分は新移住地を以て一生涯の安居樂土と爲して、其處に落付いてしまつたのである。

斯くして、安居樂土を獲得した彼等華僑は其後絶えず本國後輩の誘引、或は指導に努力協助を惜しまなかつた爲、今日の

様な世界的發展を見る迄に至つたのであつて其の功績たるや、實に支那民族中の如何なる豪傑にも優り、史上特筆大書するに値するものである。

此等の華僑中、南洋華僑は、他民族と凡ゆる方面に生存競争を續け來り、遂に其經濟界を支配するに至つたのであるが、其の勢力の大なると又、祖國愛の赤誠とに至つては實に、在支本國人に優るとも劣らないものがある。

支那の革命史を緝いて觀るに、革命基金は殆んど皆彼等南洋華僑が、長年に亘り血と汗の惡戰苦闘に依て得たる資産を投出し援助したる賜であつて、其の金額は正に數千萬圓にも達してゐる。加之一朝革命家が事破れて海外に亡命するの余儀なきに至つたならば、之等革命家を没落のどん底に落としてはならぬといふので、誠心誠意庇護し優遇するを常としたのである。

例へば、月僅かに十元の収入に過ぎない者でも二、三十元據金する者があり、馬來半島ニイグリ州の譚德棟氏の如きは、その所有する店内の器具一切迄も賣拂つた五千圓を一文残さず悉く廣東の革命に提供したり、又安南の黃景南氏の如きも、長年血と涙の奮闘に依つて漸く貯蓄したる數千圓を惜しげなく、軍需費に充てる等斯かる例は他にも枚擧に遑なき程で、後から後からと寄附者は群を爲して輩出したのである。

蓋し革命の基金調達のある度に、華僑は自己の全財産を投げ出し而も何等惜しむ所はない。その赤誠に至つては實に天地を貫き鬼神をも泣かせるものがある。

然るに、在支本國民は華僑が愛國心を以て衷心より其の革命基金を惜しみ無く、献金提供するものとは思はず、單に華僑よりはかゝる資金が容易に得られるものと誤解してゐる。(陳宗山著南洋華僑の革命に對する努力より譯出)

如斯、華僑は革命に對し、經濟的援助を爲すのみでなく、挺身自ら革命の先頭に立つて、奔走活躍する者も多いのである。故を以て孫文は曾て「華僑は革命の母なり」と謂つてゐる。

然し乍ら、華僑は獨り革命の爲に貢獻したる許りで無く、中國の貿易調整にも大なる貢獻を爲してゐる。中國は從來より年々莫大なる入超を續け、其額三億圓以上に達し、爲に民衆は窮乏し、財政も亦蕩盡したのであるが、幸にもその入超は、全部、華僑の送金に依つて補充せられし爲、中國の經濟界は破綻の悲運より免がるゝ事を得たのである。

如斯華僑は中國の國運盛衰に至大の關係があり、重要視すべきを以て、史家は其の功勞を國史上に努めて記述せねばならぬと信ずる。

中國と南洋間の交通及び貿易に關し、中國並に西洋の學者は遠く周及び秦の時代に遡つて次の様に記述してゐる。

比律賓大學の歴史教授クーライ氏の説に「西世紀元前即ち、中國の周秦の時代に於て比律賓人と中國人とは既に往來した形跡がある。比律賓政府は屢々貢物を中國政府に献上し、又中國の朝廷は之に對して爵位を授け又は、珍物を送つた。之即ち政治上の關係である。又、中國の商人は、例へば米を買上ぐる等常に比律賓に貿易し、三月より五月にかけて歸國した。之即ち商業上の關係である」と。

以上の如き説を見ても、中國民族は昔日より南洋開拓に意を用ひたることは明らかであるが、其後南洋は世界各國の領有又は分配に歸したのである。

南洋の大地を覆ふ自然林に最初の斧を下し、猛虎野獸の横行する中に、ゴム樹を栽植したのは華僑である。其外馬來の錫鑛業を開發し、又萬病の發源地と稱せらるゝパンカー島及びピリト島を開發したのも亦華僑である。

瓜哇の糖業、茶業、セレベス島の煙草、珈琲、石炭、ボルネオの椰子其の他世界に名高き錫の生産等其の原動力は、殆んど華僑に依つて提供せられたものである。

サラワク王チアルスボツキースの言に「南洋に華僑が居なかつたら吾人はたつた一日でも何事も爲すことは出来ぬ」と。又英國の總督スインテンハム氏が賞して曰く「馬來半島が今日の如き繁榮を得たのは皆之華僑の努力の賜物である」と。

從來南洋と呼稱せらるゝのは、單に英の馬來半島及北ボルネオ、和蘭の東印度諸島、米の比律賓を指し、其の範圍は狭少であるけれども、廣義の南洋は則ち、安南、泰國、緬甸をも包括するものである。安南、泰國、緬甸は遠き昔より中國に屬し其の管轄にあつたことは周知の事實であるが、今茲に記述することを略し本紙記述の範圍は今暫らく所謂呼稱せる南洋に留めることとする。

余は信念する。中國民族は智力のみでなく、體力或は團體力の方面等に於ても決して、世界の如何なる優秀なる人種にも劣るものではない。目下、國難日に増し、或は外國に輕侮せられつゝある今日、苟も中國民としての愛國心と自信力とが缺如し、墮落せんとする者あらば須らく、本紙を觀て奮起せられよ。

顧みるに支那は萬歴時代の昔より海外渡航を嚴禁したる爲、其の虚に乗じて西洋人は南洋を奪取し、此處を本據地として魔手を伸長したのである。

支那本國人は海外に出稼ぎしたる華僑を害蟲視し、西洋人は又之を牛馬の如く白眼視した。故にその受くる所の精神的打擊は實に推して知るべしで、之は如何なる民族も體驗したことは恐らく無いであらう。然るに華僑は黙々として一切を忍び、健實に奮闘して、遂に南洋の經濟的權益を根強く掌握することを得たのである。

茲に於て、南洋に於ける外國人は其の背景たる國力を借りて、華僑の勢力を驅逐し且つ崩壊せんと企てたが毫も實効を奏せなかつた。之より見ても世界人種の中、吾々中國人程卓越した偉大なる人種が他にあるであらうか。

數年前、日本人長永正義氏は一論説を海外の雜誌に掲げて「支那は國弱民強なり」と謂つた。日本は南進を企圖したが力及ばず、中國は國力衰弱せりと云つても、民族には侮る事の出来ない底力がある。

吾人が本書を著述したる所以のもの一に民族の自覺を惹起し自信力を鼓舞するに資せんが爲であつて、その一助にもなれば欣快此なき處である。

二、華僑の人口

明代に於てはマラッカ、スマトラ、爪哇、比律賓の各島に在住する華僑數は巨萬に達した。又十五世紀頃マニラの國王は華人の移住を極力奨励した爲渡航する者が甚だ多かつた（華僑史に依る）。前清時代と喜道時代との間バタビヤに於ける華僑の數は數萬人もあつた。或は、崑甸に居て金鑛業に従事し、その活動區域正に峴々數十里に亘つて散在してゐるのもあつた。セレベス島、新嘉坡に密集するものも多かつた。光緒十五年張讓といふもの福成を從使として、東海島一帶の地圖を畫いたがその記述した所に依れば、比律賓群島には既に華僑五萬餘居り、馬來半島のケラントアン州には一萬五千人、トレンガヌ貳千五百、パハン州三百、ジョホール州七萬五千、セレベス七萬五千五百、セラングール七萬三千一百、シームラン一萬八千、新嘉坡十二萬二千、ピナン島八萬八千、マラッカ一萬八千二百、スマトラ十一萬、爪哇二十萬四千六百、ボルネオ十萬餘人、總計八拾六萬餘人ありと述べてゐる。

華僑が海外へ進出した原因は主として革命の際、争亂を避けて南へ渡舟したに因るものである。唐末の人士にして、黃巢を避けんとしてスマトラに渡つたもの、内本國に在住する人士に劣らず私かに成功した者がある。爪哇に渡航した鄭所南の如く又、天地會の最も盛大な新嘉坡に移住した華僑等は、本國で宿望を達することが出来ないで遂に渡航するに至つたものである。黃森莽が衆を率ゐてマニラに入殖した如き、又林道乾が戰艦を以て呂宋を攻撃したる等何れもその例である。

「富を獲得せんとするならば、須らく冒險を犯さなくてはならぬ」との西洋人の巧みな言葉に吊られて、彼等は本國に妻子を残して渡航し、遂には南洋の土人と結婚する者が非常に多くなると云ふ状態である。かゝる状態であつたが爲に雜婚が長年に亘つて行はれ、自然血統も混雜して今日では全然識別出来ない程になつたのである。

謝清高氏が云つた通り、比律賓人の容貌は中國人に似てゐる者が多く、又爪哇、ボルネオ各地に於ては支那人と土人との混血兒が非常に多いといふことである。民國二十年（一九三一年）の在外華僑を統計すれば

英領馬來及びボルネオ	二百萬人
蘭領東印度	百二十三萬三千人
比律賓群島	十萬八千人
合 計	三百三十餘萬人

となつてゐるが確實なる統計上の數字は依然不明である。

サラワクのランソン主教曰く、英領ボルネオに於ける華僑の數は三十五萬乃至四十萬である。（華僑史による）ボルネオ土

人中でも支那人の血統を受けたものが繁榮してゐるが、その信奉する宗教も支那人（華僑）と混同して居る。其他、各地毎に情況が異なつて居り、和蘭及び米領比律賓等では、總べてのものが華僑と土人との婚雜したものではないが、然し統計の據るべきものが無い爲詳細不明である。

以上の混血兒は法律上和蘭又は比律賓の支配下に置かれて居り、中國人として認定された事はないが其の數は恐らく數百萬を算するであらう。

故に以上の事實より觀て、和蘭領及び比律賓に在住する華僑數は實質上四百萬人と稱するも可である。
華僑に二種あつて

- 一、は家庭を本國に置き南洋に出稼ぎするもの
 - 二、は南洋に永住し、漢文と支那語を知らぬもの
- 之である。故に眞に支那本國の實情を知るものは一の華僑のみである。

最近、南洋に渡航した華僑の中福建人は三分の一を占め、廣東人四分の一で其他は客家及び潮州之に次ぎ海南島人又之に次いでゐる。

從來、南洋に赴く華僑の數は實に數十萬にも上つたのであるが、一九二九年以後は南洋經濟界の疲弊衰落の爲渡航者も急減し、其上反つて南洋より本國に歸つてくるものが日毎に増加して來た傾向がある。

近年に於て南洋に移住したる華僑數は左表の通りである。

年次	入國者	出國者	入超	出超
一九二五年	二一四、七〇〇	七八、〇〇〇	一三六、七〇〇	
一九二六年	三四八、六〇〇	一二〇、〇〇〇	二二八、六〇〇	
一九二九年	一九五、六一三	三三九、九六九		一四四、三五六
一九三〇年	一五一、六九三	二八七、九〇三		一三六、二一〇
一九三一年	七九、〇八五	二二二、九〇〇		一三八、八一五
一九三二年	三三、五〇〇	一六一、八〇〇		一二八、三〇〇

比律賓に移住したる華僑

年次	入國者	出國者	入超	出超
一九二二年	一三、九五四	一三、五九八	三五六	
一九二四年	一三、三七六	一二、四九七	八七九	
一九二六年	一七、五二六	一三、二四二	四、二八四	
一九二八年	一六、三四九	一三、八六七	二、四八二	
一九三〇年	一〇、八八一	一五、四七四		五、四〇七
一九三一年	一六、六〇八	二一、〇三四		四、三五六
一九三二年	二二、一九二	一七、七六七		五、五七五

蘭領東印度に移住したる華僑

年	入 殖 者
一九二八年	四一、一五七人
一九二九年	三五、九四六人
一九三〇年	三二、一八一一人
一九三一年	一一、七〇二人
同 年	同
同 年	同
同 年	同

蘭領東印度に移住した支那人の数は、一九二五年翌二六年代は年二五六萬前後を下る事は無かつたが、最近入國税を賦課される事になつてからその入殖者は、漸次減少するに至つた。

華僑が各地に移住する他の主なる原因は、本國に於ける窮乏に堪へず、生活安定を求むる爲であつて、各都會に移住する者も亦少なく無いのである。

英領では馬來半島に最も多く、新嘉坡の人口、五十六萬六千人に對し、華僑はその十分の六即ち四十二萬一千人を占めてゐる。(一九三一年の調査に依る)

和蘭領に在住する華僑の数は南洋に於ける全華僑の約半分を占め、比律賓ではマニラに最も多く居住してゐる。英領馬來半島の人口の中華僑はその十分の四を占め、比律賓では十分の一を占めてゐる。

三、華僑の潜在勢力

南洋に在住してゐる華僑は、政治的に何等頼るものが無い爲に、自衛及び相互扶助の目的を以て、中華會館、商工會、俱樂部なるものを組織して居り、又地方では同性質の結社の如きものを作つて互に聯絡してゐる。中華會館は華僑の中央機關であつて、彼等は會員中より代表を選抜して本國に派遣し、政治的にも相當の勢力を持つて居る。

最近國民黨は南洋各地に黨の支部を設立し、それを通じて、華僑に凡ゆる方面の援助を與へて來たが居留地政府當局の壓迫激しき爲、己むなくその國民黨なる名稱を撤廢してしまつた。又最近の十年間に於ては華僑の結社組織極めて多くなり、その潛勢力たるや實に驚くべきものがあつたが、今や南洋各地政府の制壓に遇ひ、今や僅かに秘密的な活動を繼續してゐるのみである。

その中央機關は馬來半島の新嘉坡に設立せられ、加入團體が三十二ある。毎年二名の代表を選抜し年中の召集開會の事務處理、其他教育、慈善及び革命事業の募金等諸般の事務に當たらしめ、全會員は全力を盡して之を援助し、其の組織も亦牢固たるものがある。

近時英國の制壓下に置かれつゝあるも、尙抗日救國の活動を續けて居り、その勢力、寔に、本國を凌駕するものがある次第である。

四、經濟方面の活動

A 華僑の經濟的基礎

華僑の南洋に於ける經濟狀況を知らんと欲するならば、先づ須らく遠い昔に遡つて検討する事が必要である。夫故に明朝

時代に於ける華僑の経済的基礎は如何にして築き上げられたか、先づ之より記述する事にする。

(1) 馬來方面

英國の總督 Swettenham は華僑に關し左の如く論及してゐる。

「錫鑛は英領馬來に於ける收入の大部分を占むるを以て、英政府は之に保護を加へた。從來、錫鑛の採掘に従事する勞働者は殆んど華僑であつて、實に世界産錫量の二分の一に及んでゐる。思ふに馬來半島の如き今日の繁榮を持來した所以のものは一に華僑の力に起因するものであると云つても決して過言ではない」と。

白人が未だ南洋の天地を侵略しなかつた時に、支那人は早既に此地の礦業に従事し、商業、農業、漁業等、凡ゆる方面の事業を經營してゐた。白人が來て領有するに及んで、その道路の改修、土木事業の振興、行政の財源等之等は總べて華僑の負擔にしてしまつたのである。當時に於ても、華僑の鑛山開發の實績は毫も、今日に劣ることなく、その繁榮を致した時代も決して尠くは無かつた。之に就ても夢忘れてならぬのは、開發の爲幾多の人命を犠牲に供した事である。其他勞働、樵夫、大工、煉瓦燒、石屋、道路の掘鑿等凡ゆる事業に従事し、巨額の資本を本島に投資した。之れ白人が決して企て及ぶことの出來ない所である。又船舶公司の設立等もあり、華僑の之等事業經營に對し、英國はその搾取した税額の莫大に上るのを見て、狂喜したと云ふ事から察しても這般の事情を知ることが出来るのである。

故に讀者は華僑が馬來に於て貢獻した力の如何に大なるものであつたかといふ事を考へねばならぬ。

(2) ボルネオ方面

十五世紀より十六世紀にかけてムツニー王は極力華僑の入殖を奨励したが、入殖した華僑は主として胡椒の栽培に従事し、尙移出業を經營した。入殖後二百年の間、本島政府の保護の下に益々繁榮したのであるが、政府は彼等の發展に恐れをなし、之を警戒すると共に、遂には屢々虐待するに至つたので漸次歸國する者が生じて來た。

(3) 比律賓方面

西班牙人が本島を統治するに當つては保甲制度を採用した爲、華僑インテリ階級の者は殆んどその制度の主要人物に押され、又その大半は役員ともなつた。

就中勢力の最も大なる者は陳廉善で氏は外交手腕に長じ、殊に事務を處理することが極めて敏であつた。夫故に西班牙政府官僚並に大衆の間にその名を知られ、威望があつた。夫程の人であつた爲に比律賓總督すらも氏と意見を異にして、現職に止まることが出來ず、止むを得ずして同地より立ち去つた者があつた位である。

比律賓で施行さるゝ新法律は殆んど華僑の利害關係を考慮に入れて、施行前、必ず氏の諒解を得たる後でなければ公布されず、又華僑の死刑廢止、廈門婦女子の娼婦禁止令など殆んど氏の力量、手腕に依つて實現せられたものである。

而して西班牙官吏は、華僑より賄賂を收受することを日常の茶飯事と心得てゐた爲、華僑は之を好事として、良く結納し、お蔭で華僑は全島に於ける政府機關の日常用品より、商業、貿易及び工業界の人員雇傭の如きに至る迄悉く、華僑の打算に委ねた有様である。故に一介の渡航者に過ぎなかつたものが、遂には巨萬の富を築き上げ、或は經濟界を把握する者も出て來るなど、その得意正に思ふべしである。

比律賓の領有が、西班牙より米國に移されたとき、比律賓は獨立せんとして革命を起したが、終に失敗に了つた爲、地方は非常に混亂し、産物は激減し、移輸出は不振になり、従て貨物は山の様に滞積した。それで日常必須の生活品は盡く輸入せねばならなくなつたのである。

處が當時華僑は輸入貿易業、或は又商業を營む者が多かつたので、この機會に乗じて巨利を獲得した者も少くなかつた。現在、同地で百萬長者と呼ばれてゐる華僑は殆んど皆その時の好運に恵まれたものである。

(4) 蘭領東印度方面

蘭領東印度では、華僑は概して在住土人と結合し、親和した。之即ち、西歐の勢力が東進して來て、土人に對する壓迫と輕侮は益々募り、之が爲土人の感情は日々華僑に接近するに至つたからである。其處で和蘭政府の壓迫は華僑にも又及んで來た。

例へば、有用植物の強制栽培を命じたり、通商方面に於ては獨占的収益を壟斷したり、或は又、苛酷なる法律を施行して困難に陥入れる等、その横暴は枚擧に追ない程である。流石の華僑も之等の横暴に對しては如何とも出來ず、私かに法網を潜つて密輸入する者などが出て來たのである。

蘭領東印度は、土地廣大肥沃であつて、従て物産は豊富である。にも係らず、土人は元來懶惰の風習があり何等勤勉貯蓄の念なく、之に比すれば華僑は如何なる困苦をも遂には克服し、而も勤儉貯蓄の美風をも併有してゐるので、結局は同地の經濟界を支配するに至つた譯である。

以上述べ來つた諸點より觀察するに華僑の南洋に於ける經濟的基礎は即ち數百年の遠き昔より築き來つたものであることは、火を見るよりも明らかな事實である。

B 華僑の職業

次に華僑の經濟的活動の實況を検討するに當つて先づその職業を大別して考察して見ることにする。

馬來に在住する華僑は、錫鑛業に従事する者が一番多く、ゴム、椰子、甘蔗の栽培事業に従事する者も亦多い。和蘭領の華僑は糖業、ゴム及び石炭の採掘等を經營してゐる。比律賓では麻、煙草の栽培を主とし、山林伐採等が之に次ぐものである。

南洋に於ける華僑の事業經營網は次の二種類に大別することが出来る。一は農業、礦山業、商工業に對する投資業者、二は前記各業に従事する勞働者である。

(1) 華僑の農業經營

馬來半島に於ては華僑は主にゴム、椰子、檳榔、碩、甘蔗、鳳梨等の栽培に従事してゐる。

一、ゴム 華僑の栽培してゐるゴム園の面積は約五十萬英畝である。

一、椰子 産出額不明であるが、その製造及び販賣の大部分は華僑の掌中にある。

一、檳榔 同 右

一、甘蔗 用途廣くその商權も亦華僑の掌中にある。

一、碩 食料に供し得べく華僑之を収集して製粉する者が多い。

一、薯粉 大規模の栽培及び製造亦華僑の手にある。

一、鳳梨 ゴムの栽培に失敗した者の中、鳳梨の經營に従事する者が漸次増加して來た。

蘭領東印度の主要農産物は甘蔗、ゴム、煙草及び茶の四種であつて、各國が之に投資した金額は實に十八億盾以上に達してゐる。その中和蘭は第一位で百分の六十七を占めてゐる。英國は之に次ぎ百分の十三、中國又之に次ぎ百分の十一、その額は二億六百五十八萬五千盾である。

中國人は主に糖業に投資する者が多く、中國總投資額の百分の十七を占めてゐるが、十八世紀の初期頃は特に最も盛大に經營せられたものである。其他各種の事業に投資する者も亦寡くはない。

英領ボルネオの農産物は碩、胡椒、ゴム、甘蔗、鳳梨、椰子等であつてその經營は華僑が最も多く擔當してゐる。

(2) 華僑の礦業經營狀況

馬來の礦産物は其の產出額に於て、錫礦を第一位とし、年產額四、五萬噸を算し世界錫產額の三分之一を占めてゐるが、本業に従事する者では華僑が斷然多數である。近時三十年以來西洋人は新式の機械を用ひて採掘してゐるが、華僑又之に習つて採掘した爲長足の發展を來し從て採掘量は本地總產出額の半分以上を占むる迄に進歩した。即ち一九一三年の產錫量は馬來產錫額の百分の七十四を占むるに至つたのである。

サラワクの石油事業も、華僑の經營する者甚だ多く、クウチンの金礦も亦然りである。和蘭領バンカー、ピリトンの二島に於ける錫礦業従業者は、華僑が十分の九を占め其數約三萬六千餘人である。日給は十二盾であつて、食費は会社が負擔するとのことである。

(3) 華僑の商業經營

華僑の商業界に活動しつゝある重要部門は即ち南洋一帶の物産の買入、賣出し及び輸入品を各地に販賣する所謂仲介貿易である。馬來及び英領ボルネオの物産は殆んど華僑の手に依て買入れ、又は販賣し其の勢力大なるものがある。小賣商及び行商の如きは各地に散在してゐる。直接貿易を經營する者に蘭領東印度一帶の米穀輸入商がある。彼等は米穀の輸入販賣に就いては一切の商權を掌握してゐる。比律賓稅務局の調査に依れば、比律賓の商業經營者は華僑が最も多く(三、三三五人)比律賓人之に次ぎ(三、一五二人)西班牙人及び米國人は遙かに降つて二、三百人あるのみである。從て商品の仕入高、賣上額等も華僑商人が最も多く總額三億二千萬元の中三分の一を含んでゐる。

(4) 華僑労働者

華僑労働者に二種ある。一は自由労働者であつて、二は契約労働者である。

(イ) 自由労働者は隨時隨所に於て、労働に服し得る者であつて各種の業に涉つて従事し、生活程度は在支本國の労働者に比して稍々優つてゐる。現在、南洋の富豪の中、自由労働者より身を起した者が多い。

(ロ) 契約労働者は外國事業家の招聘に依り移住した者の外、或種の奸策に陥入り、奴隸の如き待遇にて渡航を餘儀なくせられ、到着の上は畜生同様に使役虐待せらるゝ者が多數にある。彼等は到底此の種の虐待に堪へざるも、涙を吞んで奸漢の命に従ひ、凡ゆる苦難の業に従事して來たのである。然し乍ら、遂に堪え兼ねて當局の救ひを求めやうとする者續出するに至つたが、どうすることも出来なかつた。

その虐待振は實に悽慘を極め恰も牛馬に對するが如きものであつた。

(一四、六、邱玉枝譯)

昭和十四年十二月二十六日 印刷
昭和十四年十二月二十九日 發行 (非賣品)

臺北市榮町三丁目一番地
臺灣拓殖株式會社調査課
臺北市本町一丁目十番地
印刷人 江里口 秀一
臺北市上奎府町三丁目一番地
印刷所 江里口商會工場



